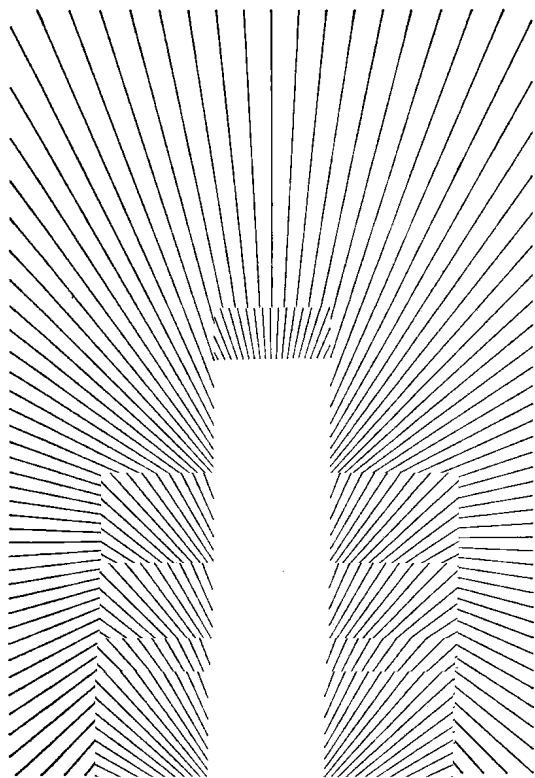


行動科学と経営

名取順一著



東海大学出版会

名取順一（なとり じゅんいち）

早稲田，アーラム両大学，ハートフォード，ボストン両大学大学院を卒業（博士の学位を受ける）。後イギリス，ドイツ等に留学。早稲田大学教授として学内の要職に就任したほか，講演・視察旅行はミシガン，オックスフォード，漢陽大学等，世界6大州にまたがる。日本経営工学学会会長，行動科学研究所所長などを歴任。昭和48年11月勲三等瑞宝章を授与さる。現在早稲田大学名誉教授，東海大学教授。

主なる著書——経営のH・R，経営のサイバネティックス，行動科学と労務管理，管理社会への提言，など多数。

行動科学と経営

1980年4月10日 第1刷発行

著者 名取順一

発行者 山田 渉

印刷者 三浦 丈夫

発行所 東海大学出版会

東京都新宿区新宿3の27の4 東海ビル
電話 03 (356) 1541 (振) 東京0-46614

印刷所 港北出版印刷

製本所 石津製本所

はしがき

人間は無限の躍進をし、科学は国境を越えて前進する。人文、生物、社会、自然の諸科学間のかべを打破し、人間行動の総合的、科学的研究をするものが行動科学である。これからは工学の行動科学的研究の世紀でもある。ホーソーン工場の実験研究も経営行動のそれであった。

経営行動科学は、経営における人間行動の研究で、それによって得た概念や方法を導入して、構成要素間の相互作用をしらべ、そのシステムを解明しようとする新学問である。これはかつての産業心理学から経営行動科学にバトンタッチされつつある。生産性向上の二要因は働く人の業績と技術的な進歩である。産業界はこの学問の理論と実証的研究をまっている。

筆者は、この小書が、企業の労使双方に、そして理工系はもちろん、法文系の経営、経済、商学部等の大学生にも、希望の光をあたえるであろうことを信ずるものである。

昭和五五年二月

著者

目次

はしがき

I 行動科学

1	行動科学の定義	1
2	行動科学の役割	2
3	行動科学の領域	4
4	行動科学の歩み	11
5	行動科学の研究	19
6	大学と情報科学	25
7	経営行動	31
8	行動主義と行動心理学	37
9	人間・行動・人間観	48
10	人間の心と人間観史	55
11	かべを打破する行動科学	63
		74

II 経営

1 経営工学史論

82

1 IEのスタート 82

2 科学的管理法 82

3 テイラーの貢献と批判 83

4 その後のIE史 84

5 世界諸国のIE 85

6 アメリカのIE 86

7 日本のIE 90

2 労務行動からみた個人と集団

94

1 労務行動 94

2 労務管理の本質と矛盾 98

3 個人と個性 100

4 集団 104

5 組織 107

3 人間・環境・公害

112

1 大陸と人間 112

2 安全を考える 119

3 環境と公害 121

4 対策と人類の問題 125

4 産業社会.....128

1 資本主義と共産主義 128

2 産業主義の論理 135

3 マネジメント 137

4 産業文化間の衝突 146

行動科学文献.....154

I 行動科学

1 行動科学の定義

行動科学 (Behavioral Science) は、人間あるいは人間集団の行動の総合的、科学的研究でその統一的理解と予測をする新しい学問である。

これは、筆者が「行動科学と労務管理」(早稲田大学出版部、昭和四二年)のはじめにのべた定義である。

史的研究の意味はふかい。人類の歴史に過去と現在と未来があるように、行動科学の歩みも同じである。行動科学の定義にも、過去のものあり、そして現在のものがあり、さらに将来それがよりよいものへと変わっていくことであろう。

オーストリア科学アカデミー行動生理学研究所長K・ローレンツは「行動は進化するか?」という書を出版した。これは動物が種を保存する生得的行動に光をあてて、進化の驚異的メカニズムを解明した、動物行動学の原点を追求した書である。行動に進化があれば、人間行動を研究する学問にも発展があるのは当然である。

日本の行動科学も、外国とくにアメリカの影響で、実証的、総合的、応用的になっていることは事実である。その進行過程も、人文科学、生物科学、社会科学、そして自然科学へと推移し、思弁的、

理論的研究から、実証的、實際的、客観的、数量的研究にかわってきたのである。すなわち、ヨーロッパ的な個人研究から、アメリカ的な共同研究へとうつったのである。

元来保守的なわが国の人々は表面流行にとびつくが、同化したり、その真相を知るには時間がかかるようである。われわれの先輩は、日本史の初期と中期に中国文化を、そして明治時代に西欧文化を輸入した。しかし、はたしてその底辺に流れる真髓を知ったかというところとあやしいものである。行動科学も独立の部門をつくるのは、その性質上なかなか困難のようである。

わが国では、人文科学者の数は多い。しかし老年期にあるようである。それに比べ、社会科学者の方が若いようである。自然科学者は工業の発展で急激に増加した。これに伴い、行動科学が流行してきたのだが、行動科学者の就職はというと、まだその門は狭く、今後の問題である。その学会もまだ未知数である。しかし、この科学はますます国際的協力へとすすまざるを得ない、そういうところまできている。

行動科学の領域には分化の側面と統合の側面がある。この学問は便宜的な一つの新しい科学体系である。これは、人間行動に関する、広範囲で一般的な法則性を発見したり、またそのための科学的知識と技術を提供できる全専門領域が集って、この学問を形成する。したがって、従来のような偏狭で独善的な、学問間のセクショナリズムは不用になった。

産業社会は産業人の集合体であり、この産業人たちの行動が産業行動である。産業人は人間であり、

この人間の行動が主題となり、これを総合的、科学的に研究する学問として行動科学がある。筆者はこの領域のこの側面をとくにくわしく叙述したい。

行動科学は、人間の本性の自然な姿を記述することによって、産業界に対し明確で、欠くべからざる貢献をすることになるであろう。巨大な体系をもつ、この科学は、終局的には、国際平和とか、人類の幸福に役だつ学問であってほしいのである。

最後に筆者は、最も短い表現として「行動科学は人間行動の総合的科学である」と定義しておくことにしよう。

2 行動科学の役割

人文、社会、生物、自然の諸科学の研究領域で、三〇年ぐらい前から、人間行動の一般法則性を発見しようとする革新的、総合的な動きがおきて、それが今や国際的に広がつつある。これが日本に紹介されたのは一九六〇年代のことであった。

人間の創造物語は「旧約」の「創世記」第一章、エデンの園からはじまるものであり、イギリスの詩人ミルトンの「失楽園」の話はあまりにも有名である。それからギリシア神話のスフィンクスの謎かけの話がある。「朝は四本足、昼は二本足で、そして夕方になると三本足で歩く動物は何か？」と

いう謎だが、その解答は人間である。これは勇士オイディプスの「それは人間」というのが答えだが、そこで怪物スフィンクスは海で死に、悲劇は閉じる。

永遠の生命をもった人間は、ホモ・サピエンス（知恵ある者）である。これはスウェーデンの博物学者のリンネの説である。かれはこの説明にギリシア七賢人の一人ソロンの格言である「汝自身を知れ」をあてている。

アリストテレスは「人間は社会的動物である」、ソクラテスは「人間は理性をもった動物である」、パスカルは「人間は考える葦である」といった。そして多くの人々は、身体と精神の二つのものが合体したものが人間であると考えてきた。

一般に、精神科学にはドイツ的な学問、人間科学にはフランス的な学問というニュアンスが濃いとされてきた。アメリカにおける人間科学は、より知的な、協力的な、総合的な香りが強い。封建的、中道的、知的な日本人が、行動科学に興味をいだくのは至極当然である。

アメリカのシカゴ大学の心理学者 J・G・ミラーが、一九四九年頃に行動科学という言葉をつくりましたといわれるが、当時その分野は人文、社会、生物科学が中心であった。この行動科学が一般的になったのは、一九一五年にフォード財団が「個人行動と人間関係」についての研究に、六ヵ年にわたって数百万ドルの財政的援助を与えたことからである。

一九五三年にフォード財団は、さらにスタンフォード大学の近くに、行動科学高等研究所を設立し

た。筆者もここを訪問し、カートライト教授等と語ったことがあるが、そこでは世界中からえられた学者が勉強していた。

一九六二年には行動科学の強化という文書が米大統領科学諮問委員会の要請で作成されている。この会の委員にはエール大学のミラー、フェスティンガー等八人の名がつけられている。この科学が、やがては世界人類の福祉と安全のためになるのが理想である。

行動科学の領域は広く、研究分野も多様である。したがって、この科学は社会の相互作用にとともに進展して行く。一九五四年にシカゴ大学行動科学研究委員会は、「この科学は人間の本性を中心的な課題とする」とうたった。あるグループは、この学問を人間社会力学に限定しようとさえする。

社会科学者ベレルソンは、「人間の行動について、客観的方法で収集した経験的証拠によって、立証された一般的な法則を確立し、人間行動を科学的に説明し、予測をする」のがこの学問であるといっている。急激に発展した新科学なるが故に、行動科学は不定形である。これは、人間行動の研究である。今後、この科学は、その内容も外貌も変化していくから、ここできびしい定義をしても無意味かも知れない。この科学は、自然科学的にも振舞わざるを得ないし、このためプラグマティックな性格を基本としている。

ミラーは次のものを行動科学に含ませている。人類学、生化学、生態学、経済学、遺伝学、地質学、歴史学、言語学、数学、神経医学、薬学、生理学、政治学、精神医学、心理学、社会学、統計学、動

物學。ペレルソンは、領域を人類學、心理學、社會學の三つにしほり、その他、いくつかの科學を加えている。すなわち、かれは、行動科學とは人間行動をとり扱うものであり、主題を科學的に研究しなければならないもの、としている。

アメリカの行動研究會議では、旧新にわけ、前者に、人類學、社會學、歴史學、經濟學、政治學、法學、心理學、教育學をあて、後者に、情報理論、サイバネティックス、言語學、記号行動論、ゲーム理論、決定理論、価値理論、一般システム理論をあてている。

英雄には欠点が多かったように、行動科學にもあいまいの点が多々ある。しかし、これが發展のため一つの論証にもなる。内と外からの要求は、絶對的でないこの學問をますます成長させていく。断片的、細分的、専門的にも、真理は深く探究する方がよい。しかし、それはやがて総合的、統合化の道をたどらねばなくなる。この総合化、統合化が行動科學の真髓である。物理学と化学が一体化してきたし、動物學と植物學とが合体して生物科學が生れた。第三次大戰を阻止できるものは、物理学、化学、生物学ではなく、精神医学であり、心理学等である、と主張する人々もあらわれてきた。現代人の人間観はかわった。そこで人間行動の根本的、科學的、協同的研究が必要視されるようになってくる。これが行動科學の一つの役割でもある。

かつて、J・B・ワトソンは行動をしぼって心理学の中心概念にした（一九一八年）。これを行動主義心理学という。行動とは總體的な生活である。行動を有機体の活動とか、システムの出力という人

もある。

行動主義は実証主義、科学主義の一つの発展形態である。すなわち近代合理主義に根ざしているといえる。すなわち、没倫理的な事実主義が行動主義だ、ということにもなる。しかし、二〇世紀の現代的視点にたつと、資本主義とか社会主義とかでわりきれない、生きた現象が人類社会には動いていることに気づくであろう。

世界史は二〇世紀まで流れてきた。そして、現代は情報化時代と言われ、科学技術は人間を月の世界にまでこんだ。ここでは実存主義も、マルクス主義も、新カント主義も、種々の実証主義も、全能でないことがわかった。今やデカルト、ガリレオ、ニュートン等の自然観すら改変されようとしている。従来の自然観、社会観、世界観、人間観、歴史観は、いまや新しい洗礼をうけようとしている。総合化と科学化をうたう行動科学の役割はとにかく大きい。

一九世紀には、アメリカはニューデール改革を、イギリスはケインズ革命を登場させた。さらに、ソ連の経済計画と、第二次世界大戦が人々の思考を変えた。このような大きな変動のもとで、現代化革命とでもいべき行動科学の登場となったのである。そしてこの学問は、近代の自然法的世界観を根底からゆさぶることになった。数理科学の導入、種々の協同研究がそれにつづく。そして管理時代の誕生となる。ここで新しい社会開発が行われる。世界観の変革、諸科学の現代化、人間観と方法論の転換等、行動科学の役割は広く、深い。

科学革命をおこした行動科学という哲学は、社会人、経済人、個人主体、集団、本能論等の概念をとり、またそれを含むものでもある。行動科学の特質についても多くの人々がさまざまなことをいう。曰く、経験主義的、科学的方法、異学間の協力、数量化、巨大化、社会化、総合化、科学化、データに固執する事実主義、現実主義、技術主義、還元主義、御用科学等々。またこれは善玉にも、悪玉にもなれるし、戦争の計画とその遂行にすら役立つ、危険で恐るべき軍事的な側面すらもっている。この知的産物を破壊的な方面よりも建設的な方面につかうのが現代人の使命である。

現代は、管理の効果を、生産高だけでなく、従業員の態度や、習慣や、行動の変容から探究するようになってきた。行動科学は最近ではマーケティングや企業のマネジメントと深く結合して学者や実務家の注目をあつめている。

この科学がアメリカで叫ばれたしたのは一九五〇年代であるから、その歴史はわずか二〇数年の記録にすぎない。現在アメリカでは、政策科学的な傾向が強くなり、意思決定を科学化しようとしているし、オートメーション、少年非行、人種問題、核実験、キューバ、ベトナム、中東、アフリカなど、直面する多くの問題をも科学的に解決しようと努力してきた。

アメリカの大学の例を少しとると、一九三八年にエール大学にバックキーを主班とする研究所が、一九四三年にシカゴ大学にガーディナー、ウォーナー、ホワイトらによって学際研究委員会が、一九四四年にはマサチューセッツ工科大学に、レビンによるグループ・ダイナミックス研究所が設置された。

これはカートライト、ザンダーがうけついで一九四八年にミシガン大学にうつった。

わが国でも、日本学術会議が研究計画の一つに行動科学をとりあげたし、大学や企業でも研究を始め、訳書や論文も公刊された。

早稲田工業経営学会に行動科学研究会ができたし、われわれも昭和四〇年八月行動科学研究グループを編成し、共同研究をつづけると同時に、毎月数十名の出席者と会合し、経営行動に中心をおき、経営工学的アプローチを試み、初期の使命を果たした。

当時、筆者は朋友のミシガン・ステート大学のH・C・スミス教授の“Psychology of Industrial Behavior”, McGraw-Hill, 1955 と K. Davis と W.G. Scott が編集した“Reading in Human Relations”, McGraw-Hill, 1959 と G.D.G. Moore の“Contributions to Management Philosophy from the Behavioral Sciences”を興味深く読んだ。

こゝいて筆者の机上には次のような文献が次々とおかれるようになった。

Lupton, T., Industrial Behavior and Personnel Management, Institute of Personnel Management, London, 1964

Likert, R., New Patterns of Management, McGraw-Hill, 1961

Viteles, M.S., Motivation and Morale in Industry, Norton, 1953

Brown, J.A.C., The Social Psychology of Industry, Penguin Books, 1962